

## 翻弄される読者

### — ‘The Secret Sharer’ の語りについて —

野口祐子

#### 序

コンラッド (Joseph Conrad) の比較的長い短篇小説 ‘The Secret Sharer’ は、彼の代表作の一つと見做されて、コンラッド批評の中でしばしば取り上げられてきた。この作品についての従来の批評は概ね、通過儀礼のテーマを軸に論じるもので、“initiation”, “test”, “self-knowledge” といったキーワードを用いて、主人公である船長の精神的試練と成長の物語として読むことが多かった<sup>1)</sup>。批評は、この通過儀礼のテーマを裏付ける作業を主に行ってきたと言える。そのために、あるいは Guerard のように “night journey” という物語の型に当てはめたり<sup>2)</sup>、あるいは Daleski のように “dispossession of self” を経験することによって到達する “self-knowledge” という説明のしかたで<sup>3)</sup>、批評自体が一貫性のある物語を創ってきた。そしてそれらは、この短篇のプロットと、対比と類似を基とした構造について説得力を持つ説明となっている。

しかし、この短篇小説は、一般に通過儀礼をテーマとする物語が展開し、解決をみるといった場合に読者が感じるであろう満足感を与えてくれるだろうか。主人公の精神的成長に共感を覚え、感動することができるだろうか。いや、この作品の面白さは、物語が通過儀礼のテーマに沿って展開しながら、実は、読者がそのように主人公と一体化し素直に感動することを阻むところにある。なぜそんなことが起こるのか。

従来の批評では、大抵の場合、テキストに明快な意味を読み取り、テーマと構造上の一貫性を見いだす努力がなされてきた。しかし一方で、この短篇の持つ曖昧さに目を向ける批評もないわけではなかった。たとえば前掲の Daleski によれば、この作品では道徳的な問題が十分に追究されていないために曖昧さが生じているが、それは作者が心理的問題を中心に書き

たかったからだ」と説明している<sup>4)</sup>。Jakob Lothe はもっと厳しく道徳的問題の軽視を指摘している。

... the combination of technical virtuosity and psychological emphasis tends to blur, rather than resolve, the most pressing moral questions which it dramatizes.<sup>5)</sup>

This is not to say that the story should necessarily resolve, or suggest unambiguous answers to, the moral problems it presents (compare Leggatt's killing a man and the captain's risking a shipwreck) — complex ethical issues defy easy answers, and indeed such answers are rarely given in Conrad's fiction. But there is a certain negligence noticeable in the way the problems are dramatized in 'The Secret Sharer'.<sup>6)</sup>

Lothe によれば、緻密な構造、巧みな展開とサスペンスによって完成度の高い物語が出来上がっているのだが、道徳的問題の追究が、そのためになおざりになっている。そこから、物語の中心となるレガットの殺人行為と、船長がレガットをかくまう行為についての道徳的曖昧さが生じるのだと言う。

このように、Daleski も Lothe も曖昧さには積極的な価値を与えていない。しかし曖昧さは本当に作者の道徳的問題の軽視から生じたものなのだろうか。曖昧さに積極的な意味はないのだろうか。

そこでこの小論では、曖昧さが如何に生じるのか、それが読みにどんな影響を与えるのかを考えたい。この作品の曖昧な点を、辻褃の合う解釈で解消しようとするのではなく、曖昧さについて、正面から論じたい。

そのためには、これまであまり問題にされることのなかった語りを分析する作業が必要となろう。なぜなら、読者が確固とした判断基準を持たない主な原因は、全てが船長の一人称の語りによって読者に提示されるためだと考えられるからである。そこで以下の各章では、語りの分析を通して、この物語の倫理的曖昧さを生み出す原因と思われる、レガットの殺人行為

の扱い方に焦点を合わせて論じることにはしたい。それゆえここでは、従来の批評が主に論じてきた船長とレガットの分身関係や、船長の試練の山場となるコーリン島への異常接近の意味などとは異なった点に光を当てた議論を展開することになろう。

## I 語り手の物の見え方

レガットの扱い方について考察する前に、まず作品の導入部の語りを分析することから始めよう<sup>7)</sup>。導入部には語り手のものの見方の特徴が凝縮されていて、以降の話の展開をどう捉えるべきかについて、重要な示唆を与えていると思われるので、詳しく読んでいきたい。

冒頭、船上から眺めたメナム河口の風景は、よく指摘されるように、多分に語り手である船長の心象風景でもある。そこには船長の不安と孤独が色濃く投影されている。第一文から、外界に対する無知を示唆する“mysterious”, “incomprehensible”と、孤独を示唆する“as if abandoned”, “no sign of human habitation”という表現が使われる。メナム河へと去っていく曳き船への惜別の眼差しは、その姿が視界から消えてもなお名残惜しそうに、船の煙突から出た煙の跡を追っている。そして第一段落は“*And I was left alone with my ship, anchored at the head of the Gulf of Siam*”で終わる。船員たちの存在は船長の心の視野から外れ、彼は未だ懇意になれない船と二人きりだと感じるのである。

第二段落において、船長は自らの置かれた状況を“*the starting point of a long journey*”, “*the threshold of a long passage*”といった表現で提示し、これから新たな航海が始まるばかりでなく、自分が新たな人生の門口に立っているという認識を持っていることが分かる。その門口で船長が感じている不安が、どうやら彼の見る物に投影されているらしい。

この点に関しては異論はないであろう。そして、この点から出発して、この作品を船長の通過儀礼の物語として読むのがこれまでの解釈の常道であった。しかしここでは、この箇所の語り手の性格に注目したい。船長の思考や感情が彼の見る物に投影されていることの意義を考えてみたいのであ

る。

そこでもう一度冒頭部分の語りを分析してみると、船長の物の見え方ははっきりしてくる。

On my right hand there were lines of fishing-stakes resembling a mysterious system of half-submerged bamboo fences, incomprehensible in its division of the domain of tropical fishes, and crazy of aspect as if abandoned for ever by some nomad tribe of fishermen now gone to the other end of the ocean; for there was no sign of human habitation as far as the eye could reach. (91)

これは単なる風景描写ではなく、すでに指摘したように、自分の周囲に在る事物の意味がよく分からないために感じる不安の表出でもある。だが、ここに表れているのはそれだけではない。船長の眼前に広がる風景は、ただ単に理解不能なものとして横たわるのではなく、「放浪の民」の比喻によって船長の好きなように味付けされている。一般に静寂の与える意味は、それを味わう人の心境によって異なるだろう。辺りにひと気がないのは、ちょうど今、曳き船が帰っていったように、ひょっとしたら海での一日の営みを終えて人々が帰っていった後に訪れた心和む静寂と感じられるものかもしれない。しかし船長は、眼前の風景を殊更に人間社会から見捨てられた場所の風景であるかのように見たがっている。そして静寂は第二段落において一層はっきりと意識化され、船長が今その甲板にいる船は“very still in an immense stillness”と表現されている。これはあたかも巨大な静寂に呑み込まれるような不安を伝える。また雲ひとつなく、さざ波も立たない夕暮は、“breathless pause”と表され、ただ熱帯の夕凧の息苦しいような静寂を描写するだけでなく、その風景には何かが起こる前の息をのむ緊張感が持ち込まれている。

ひと気がない海、静寂、夕凧、それらは船長独自の意味づけをされて提示される。第一段落の第二文も同様である。

To the left a group of barren islets, suggesting ruins of stone walls, towers, and blockhouses. . . . (91)

小島の群は自然の形象であるのに、それが船長の目には、これも「まるで」見捨てられた要塞のように映る。また曳き船が自分の理解できる人間社会に属する最後のものであるかのように、その姿を目で追っていた船長は、それが「まるで」無情の大地に呑み込まれていく（“as though the impassive earth had swallowed her up without an effort, without a tremor”）ごとく消え去るのを見守っている。船長の眼差しは事物をありのままに理解しようとする眼差しではなく、人間社会に見捨てられたという意味、それゆえ自分が頼るものもないという意味を周囲の事物に読み込もうとしているのである。

第二段落において、船長は「すべての人間の目から遠く離れ、自分の行為を見物し、裁く者としては空と海しかないところでの（“far from all human eyes, with only sky and sea for spectators and for judges”）」、長く苦しい仕事に乗り出すのだ、と語る。しかし奇妙なことではないか。船というのは言わば小さな社会である。同じく船上の世界を素材とするコンラッドの初期の作品 *The Nigger of the ‘Narcissus’* や *‘Typhoon’* では、個人の生き方ばかりでなく、集団内に発生する動きや影響関係が社会的な生の縮図として描かれている。しかし *‘The Secret Sharer’* の船長にとって、船員たちはこの航海においても船長の人生における新たな旅立ちにおいても関わり合うべき重要な人物として意識に上ってこないと考えられる。

もともと、船長は船員たちに馴染みがないのだし、船長になって初めての航海を孤独な闘いに見做すのは、ごく自然なことだと言えるかもしれない。しかしそれにしても自分を見つめ、裁くべきは空と海のみであるとは、船上社会を人間の集団と見做そうとしないで船員たちとの関わり合いを意図的に避けようとしていると言わざるをえない。

ただし、この船長像について、コンラッド作品において重要な人間像である、孤独のうちに自己の内部の闇と向かい合う男たちのひとりを見做すことは可能である。そして実際この物語を船長の精神的成長の物語と捉える読み方では、彼がレガットを媒介にして自らの闇を内に取り込み克服し

たのだと読まれることが多い。しかし、そのような明快な読み方に疑問を持たせる手掛かりとなるものが、テキスト中に幾つも埋め込まれているのも、否定できない。

そのような手掛かりを、冒頭部から更に探してみよう。船長のものの見方、感じ方に自己中心的な側面があるらしいことは、その主観に彩られた風景描写に表れていた。さらにそれは、第三段落の終わりで、船上からの景色を眺めながら孤独に浸っていたのを切り上げることになったのが船員たちの生活の音であり、それを“disturbing sounds”と表していることからわかる。どうやら船長は、孤独なのではなくて、自ら船員たちに背を向け、進んで孤独であろうとしているようである。そして全ての事物事象は、船長の語りの中で、彼の孤独であろうとする意志によって色付けされている。満天の星さえもである。船長にとって晴れ渡った夜空に現れた星々は美しいものではなく、孤独の邪魔をする無数の目となる。彼は天の凝視からも逃れたいのだ。

このようにこの語り手は、空と海を照覧あれと、これからの航海を孤独な闘いと考えているが、同時に人の眼差しからも天の眼差しからも逃れたいという、実のところ非常に主観的な、そして消極的な姿勢で物を見ている。そのような姿勢によって、船長は物事を自分の見たいようにしか見ない語り手となっている。船長は所謂「信頼できない語り手」と呼んでもよいだろう。それゆえ、彼の語りの中に示される解釈・判断は、彼のこう見たい、こう考えたいという欲望によって強く動機づけられていると考えられるのである。

## II 誘惑される読者

レガットはそんな船長の前に現れるのだ。夜の見張り番を自ら引き受けた船長はひとり甲板に立って、船上に送る人生の、誘惑も動揺もない単純な美しさを思い、心打たれる。

And suddenly I rejoiced in the great security of the sea as com-

pared with the unrest of the land, in my choice of that untempted life presenting no disquieting problems, invested with an elementary moral beauty by the absolute straightforwardness of its appeal and by the singleness of its purpose. (96)

これは、冒頭から不安と孤独に浸っていた船長の意識と相容れない述懐である。自分の置かれた状況に対して、自分の取りつかれている見方を振り払おうと、空元気を出して自らを奮い立たせているかのようだ。というのも、この一節は、どの船も船員も大して変わりなく、海も自分を狼狽させるような伏兵を忍ばせなどしないだろうと考えて、打って変わって楽観的になった直後の述懐なのである。これは一見、船長の高揚感を伝える調子のよい一文であるが、読者にとっては、徹頭徹尾皮肉な文である。なぜなら、「海上生活の平安」も、「何ら心を乱す問題もない人生」も、「健全な魅力」と「確固とした目的」に支えられた「単純な道徳的美しさ」も、つまり「何の誘惑もない」船乗り人生というものが、次の一瞬、レガットの出現によって悉く覆されるからである。

この一文は単に船長のナイーブさを伝えるばかりではない。この物語が読者に投げかける問題自体が“disquieting problems”であり、“straightforward”でもなければ“singleness of its purpose”に貫かれてもいないし、まして“elementary moral beauty”に還元できるどころではないことを示唆している、言わば読者に対する警告を与える一文と言えるのである。

そしてその通り、次の瞬間、船長は“tempt”される。降ろしたなりにされていた縄梯子を引き上げようとして、その異様な重さに船長は思わず心の中で叫ぶ、“What the devil!”と。もちろん、慣用句である。しかし自らの前途が“untempted life”であると高を括っていた船長がここで不意打ちを喰らったのは間違いない。伏兵は自らをレガットと呼ぶ。彼は船長を誘惑にきた悪魔なのか、それとも船長の共感に値する孤独な英雄なのか。試されているのは船長だけではない。レガットをどう捉えるだろうかと試されているのは、実は読者でもあるのだ。

レガットについては様々な解釈がなされてきたが、彼を独立した個性と

して論じることは、私の議論では避けたいと思う。レガット自身の、そしてセフォラ号の船長が語る彼についての、断片的な言葉を語り手が伝える場合を除いては、レガット像が全て語り手の目を通して形成されていることを考慮に入れれば、レガットの人物像を語り手と切り離して論じることは妥当ではないと考えるからである。船長を「信頼できない語り手」とすれば、レガットがどんな人物なのか、確定する手立てはない。そしてそれが、このテキストの語りの構造がもたらす必然であると考えられる。語りに注目するならば、レガットの人物そのものを云々するよりも重要なのは、船長が彼をどう見たがっているかという点である。

そもその出会いからして、語り手の見る目には限界があった。波間に漂うレガットの体が、はじめは「何か青白い物体」として、「燐光の発光体」として、次には「首なし死体」として船長の目に映る(97)。Ian Wattの言う“delayed decoding”の典型的な例である<sup>8)</sup>。出会いの場面においてこのように船長の知覚の経過が詳しく語られることによって、冒頭の風景描写同様、この物語では語り手に事物がどう見えるかが重要な要素となっていることが、ここでも強調される。

その後の船長の行為は船長らしからぬものである。その男は夜中に人間がいるはずもない海に現れたのだから、怪しんで当然であるのに、怪しむ気色もない。むしろ彼が船に上がってきたくないのではないかと気を揉んでさえいる。船長の方から、このどこの誰とも分からぬ男を受け入れたがっているのだ。

何故そうするのか。動機についてはこれまで繰り返し論じられてきたし、ここでそれらに反論するつもりもない。いま、それよりも問題にしたいのは、船長がこの男の出現を、後にレガット自身言うように、まるで待ち構えていたごとく嬉々として受け入れていること自体である。彼はいそいそと船室に戻って自分とお揃いのパジャマを持ってきてやる。もうこの時点から、船長のこの男に対する見方は決まっていたのだ。レガットが甲板に上がってきた時から、船長は彼のことを“calm and resolute”であり、“self-possession”を持った“strong soul”であると感じる。そして直ちに彼を自分の分身と見做すのである(99-100)。

だからレガットが身の上を語りだす時には、既に船長は彼の話から距離



を置いて聞けなくなっている。レガットの殺人の告白に対して船長が“fit of temper” (101) と即座に判断しても、その判断には、何の根拠もない。レガットへの親近感から出た船長の直観があるだけだ。そしてこの直観は、既に見たように、彼の見たいようにしか見ず、考えたいようにしか考えない主観的なものの見方によって誘導されているはずだ。だから読者は船長の判断を全面的に信用するわけにはいかない。船長がレガットの言うことを受け入れるとしても、それはそうしたいからであって、何もそれが正しいからとは限らない。そうすると読者は船長の語りに導かれて、“elementary moral beauty”の世界どころか、倫理の迷宮へと足を踏み入れてしまうのだ。

迷宮の中へ連れ込まれた読者は、その中で翻弄されながら遊ぶのがよい。出口のない道を、出口へと続くまっすぐな道だと、無理に自分に言い聞かせないのがよいだろう。語りの性質に注目するならば、曖昧なレガット像について明確な答えを与えることはできない。だからここでは、レガットが悪党か、それともはずみで悪党を殺してしまった勇気ある若者か、犠牲の羊か、あるいはカイン的人物か、といった議論には加わらないでおく。レガットの人間性が道徳的に曖昧なのは、レガット像が船長の目を通して読者に示されるからであって、レガットについて論じる際には船長という個性のフィルターの存在を無視することはできないのである。

その意味で、レガットをかくまうという事態によって翻弄されるのは船長だけではないのだ。読者もまた、船長の目を通してレガットを見ながら、同時に船長の語りから距離を置いて自らの判断を下そうと努めるが、しかし判断材料として、船長の語りしか与えられていない読者にとって、決定的な判断を下す根拠はテキスト内には存在しないのだ。それゆえ読者は自らの道徳観に頼らざるをえないのだが、船長の語りはそれを揺さぶる性質のものなのである。

Cedric Watts は Oxford World's Classics 版の ‘The Secret Sharer’ についての序文を次のような言葉で結んでいる。

‘The Secret Sharer’ is a yarn and a rune; an imaginative sanctuary which proves to be a baited trap.<sup>9)</sup>

この一文は、この短篇小説の想像力を刺激する魅力をうまく言い当てている。と同時に、この物語が読者の道徳観を攪乱する力を持っていることを指摘している。ここで Watts の言う “a baited trap” は、読者が直面するまさにこのような事態を指しているのだ。

たとえば私たちは、レガットが殺人行為を犯しておいて、殺した男のような人間を “Miserable devils that have no business to live at all” (101) と呼ぶ時、その傲慢さにうろたえないか。しかしその行為について、船長は何の疑問も持たずに同情的な見方をする。またレガットが、殺した相手を悪し様に罵るのに、セフォラ号の乗組員たちが誰もそのように言わず、ただただ、殺人の残酷さに怯えているらしいのはなぜか。さらにレガットは殺人を致し方のない偶発事のように語るし、船長もその見方を受け入れているが、レガットが他の乗組員たちの同情を少しも受けていないのはなぜか。レガットによって生きる値打ちのない奴と見做された男が、嵐の中でできる限りの弔いを受けて海に葬られたのはなぜか。

これらの疑問は、レガットが叩き上げの海の男ではなく、牧師という知識人階級の息子であり、セフォラ号上で孤立していたらしいことから、船員たちをすべて敵にまわしていた孤独なヒーローというレガット像を描けば一通りの説明はつくだろう。そして今、船の中で孤立していると感じている船長が進んで選び採るレガット像といえ、この像以外にない。しかし、セフォラ号の人々のレガットに対する見方は、結局のところはつきり分からないし、事件の真相も、レガットの見方からだけでは到底知ることなどできない。だから、語り手の見方をそのまま受け入れた孤独なヒーロー像が、そのまま真のレガット像だという根拠はどこにもない。その点で、レガットを船長の理想像と見做す Daniel Curley 等の議論は、語り手である船長の物の見方にあまりにも無批判すぎて、レガットをひたすら英雄視しすぎているように思われる<sup>10)</sup>。そのために Curley のように、レガットが殺人を犯したのは、大波に襲われた時、自分の体を支えるために相手の首にしがみついたのだという、船長もやらない弁解までやって、レガットの行為を正当化しようとしている<sup>11)</sup>。しかし彼の行為が正当と判断され得るかどうかは、先に挙げたいくつかの疑問のゆえに甚だ怪しいのである。私たちは、レガットの行為を正当化して読むどころか、むしろレガット自

身が行う自己正当化に、そして船長が何の躊躇もせずに行うレガットの行為の正当化に戸惑ってしまうのだ。

船長によるレガットの正当化は、次の引用部分に典型的に現れている。

It was all very simple. The same strung-up force which had given twenty-four men a chance, at least, for their lives, had, in a sort of recoil, crushed an unworthy mutinous existence.

(124-125)

読者の戸惑いとは裏腹に、語り手はとても分かりやすいことだと言う。まさにそのように言うこと自体が、語り手の理解の仕方を疑わせる。ここで語り手が事件についてレガットに好意的な説明をするために用いている表現に注目したい。この説明ではレガットという行為者が“the strung-up force”という抽象的な概念にすり替えられている。まるで人間が殺したのではないかのような表現である。また殺された船員は、これもまたひとりの人間と特定されない、例えばけものでもよい“an unworthy mutinous existence”に置き換えられている。

この船長の説明を受け入れるならば、レガットの殺人行為は偶然の産物であるにすぎないことになり、道徳的問題も一応は片付くだろう。しかし、行為者の存在を隠蔽するこのような表現が持つ詭弁の作用を見過ごすわけにはいかない。語り手の事件に対する解釈は、罪の所在を曖昧にすることによって、道徳的問題を避けようとしている。そのために、この語り手の説明は、レガットの行為をどのように見ればよいかを示していながら、読者を一層戸惑わせるのである。彼が“all very simple”と言うようには、ことは単純に説明され得ないのだ。

ここで注意したいのは、道徳的問題を避けようとしているのが、作者ではなく語り手だということである。語り手のこの詭弁による隠蔽を直ちに作者の願望とすることはできない。なぜなら私たちは既に語り手の物の見方の狭さ、自己中心性を際立たせるテキストの仕掛けによって、作者と語り手の距離を把握できるはずだからだ。語り手の言う“It was all very simple”は、作者の見方ではなく、作者によって意図された皮肉と解すべ

きだろう。だからここに見られるのは、先に触れた Lothe の言うような道徳的問題の忌避ではなく、その複雑さなのである。

### III 複数の見方の存在

この物語は全てが船長によって語られる。それゆえ全ては船長の目と心のフィルターを通った後の姿で提示されているのであった。しかし同時に船長の語る内容の正当性を揺るがす手掛かりとなるものがテキストには埋め込まれている。その一つが語り手の物の見え方の特徴を読者に印象づける表現であった。そして語り手のレガット観も、彼の見たいようにしか見ない態度によって支配されていることを、前章でみてきた。次に挙げて論じたいのは、物の見方の複数性についてである。全てが船長の語りに支配されているように見えながら、テキストにはその語りを相対化する手掛かりが仕掛けられているのだ。

物の見方の複数性は、セフォラ号の船長の登場で徐々に明らかになってくる。(以降、混乱を避けるために、この章では主人公の船長は「語り手」とのみ呼ぶことにする。) まず語り手の船長に対する態度から見ていこう。語り手の、船長を信じたくないと思う気持ちが、彼の船長に投げかける眼差しを決定づけている証拠は、テキスト内に散見される。まず、海に飛び込んで逃亡したレガットを捜して、船長が語り手の船にやってきた時、語り手はひと目で船長の人となり判断してしまう。彼は船長の外見からけなしだすのだが、それをレガットと対照的なものとして描き出す。レガットは均整のとれた美しい姿と意志力の表れた顔立ちの若者として描かれ、反対に船長の外見はしみつたれて見苦しいものとして眺められる。ここで彼らの対照的な容姿は、何も骨相学上の見本として並置されているわけではないだろう。それらは客観的描写ではなく、彼らを眺める語り手の眼差しを通して解釈され、色付けされた姿なのだ。だから私たちはこの船長の描写を、19世紀リアリズム小説の常道であった外見描写による人格描出の手法であると単純に割り切って、語り手の言うままに船長の人格の欠陥を鵜呑みにするべきではない。

また語り手は、船長がまだ一言も口をきかないうちから、“a spiritless tenacity was his main characteristic, I judged” (116) と考えるのだが、これは何とも性急な判断である。さらに、船長の臆したような物腰も、それは語り手が意図的にとった威圧的な態度にひるんでの事と推測されるのだが、語り手はそれを“in the manner of a criminal making a reluctant and doleful confession” (116) と見做す。語り手はレガットと船長を対照的に捉えていて、彼らの立場を逆転させたいと欲している。その願望が船長に対するこのような判断として表れたのだ。冒頭の風景描写、レガットとの出会いの場面、そしてここでセフォラ号の船長との出会いの場面においても、まず語り手の極端に直観的で主観的な判断を提示することによって、やはり語り手の物の見方が彼の願望に左右されていることが強調される。そのようなお膳立ての後で交わされる船長と語り手のやりとりに対して、読者は語り手の一方的な見方に懐疑的にならざるをえない。

さて、セフォラ号の船長が事件について説明した時、彼は英国船の上で起こるべきでないことが起きてしまったと語る。船長は明らかに、レガットの犯した殺人を重大な犯罪と見做しているのだ。彼はレガットの行為をレガット個人の立場に立って見ていない。その見方は常識的で、社会の規範を遵守する見方を代表している。そして語り手の嫌っている一等航海士もその点では同様である。彼は全てのことに単純明快な説明をつけなければ気が済まない。そして事件のことを耳にすると、聞いたこともないひどい事件だという見方をする。

対して語り手は、分身関係にあるという意識に支配されて、レガットの人物像と彼の行為を、社会の規範を基準にしてではなく、レガットの立場から見ている。その立場によれば、レガットを法も他の人間も裁くことはできない。レガットは、捕まれば彼を裁くことになるだろう法廷の人たちには彼を裁く権利はないと主張する (“What can they know whether I am guilty or not — or of *what* I am guilty, either? That’s my affair.” 131-132)。しかしここでも私たちは、確かにレガットのことを法廷の人たちは理解できないだろうと、レガットに説得されそうになる反面、彼の傲慢さ、自己中心性を強く印象づけられる。自分の殺した人間は生きる価値もない野良犬だと裁いておいて、誰も自分を裁くことはできないと主張す

るのは、利己的と言わざるをえない。このように読者としては、自らの見方を、あまりにも常識的でレガットの思いを無視したセフォラ号の船長たちの見方と一致させるわけにもいかないし、かといってレガットと彼を弁護する語り手の見方と一致させるわけにもいかない。

それゆえ、レガット—語り手のグループと、セフォラ号の船長—一等航海士のグループが対置されているという解釈には頷けるとしても、年若い前者が真の勇気を発揮することによって老練な後者をやりこめるという Dobrinsky の主張のような図式的解釈は、曖昧さを二項対立の構図に単純化してしまうだけで、あまり実りのあるものとは言えない<sup>12)</sup>。読者はあくまでも、二項対立の一方の価値を安易に称揚するのではなく、相矛盾する価値観の間で揺れ続けることを要求されているのではないだろうか。

レガットの人物像と彼の行為については、語り手が一定の見方を示しているにもかかわらず、テキストはそれが唯一正しい見方だと読者を納得させないのであった。そのことについて、実はテキスト自体が、解釈が一通りでありえないことを宣言している箇所がある。セフォラ号の船長の話を語り手が一蹴してしまう所である。その際、語り手は “It is not worth while to record that version” (117) というのだが、勿論これは、文字通りにとれば、船長の話など真実から遠く、改めてここで語り直す必要もないということになる。しかしまた、この一文は、船長を軽視したいという語り手の意図の表れとしても読める。更にこの文は、語り手のそんな意図にもかかわらず、一つの事件について複数の “version” が存在すること、そしてそれらは事件を見る者の立場によって異なり、互いに食い違いをみせることをも同時にあらわにしている。それら複数の “version” の中から語り手はレガットの “version” のみを正しいものとして選んでいることが、彼のこの発言から明らかである。前に引用した “strung-up force” の引き起こした事件だとする語り手の “version” は正しくて、セフォラ号の船長の “version” は虚偽だと言える根拠はどこにもない。真相は恐らくどの “version” にもないのであり、それらを融合したものの中にもないだろう。というのも、それらはそもそも異なる立場の反映であれば融合など不可能だからだ。

だから語り手がセフォラ号の船長の語ったことに価値を認めないのは、

それが虚偽だからではなく、それを信じたくないからだと考えられる。そこでセフォラ号の船長像についてあらためて考えてみると、語り手の判断を受け入れた多くの解釈では、当然のことながら船長に対しては負の価値しか与えられていないのだが、しかし上で考察してきたことから、語り手が与える船長についての“version”もまた唯一正しい船長に対する見方でありえないことは明白である。

テキストは語り手の船長に対する皮肉を意図した発言にそのことを暗示させている。既に指摘した船長の外見・物腰についての皮肉たっぷりの観察に加えて、語り手は船長を Archbold という名で記憶しているのだが、名前という客観的であるはずのものでさえ、船長を蔑みたい願望のためにそんな皮肉な名前で記憶しているのかもしれないことが読み取れる (“it was something like Archbold — but at this distance of years I hardly am sure” 116)。Archbold という名が語り手によって恣意的に付けられた可能性がある以上、その名が船長の人となりに対する皮肉になっているとわざわざ指摘することはあまり意味がない。ましてや、それを証拠の一つに挙げて船長の臆病さを論じるのは、語り手の言うことをあまりにも真に受けた読み方といわざるをえない<sup>13)</sup>。

セフォラ号の船長は語り手にも彼の“version”を共有するよう促す (“If I had seen the sight, he assured me, I would never forget it as long as I lived” 118)。しかし語り手にはそんなことは不可能な話である。彼には船長の見ているものと同じものが見られないからである。次の引用では、そのことを語り手自身が認めている。

I looked politely at Captain Archbold (if that was his name), but it was the other I saw, in a grey sleeping-suit. . . . (117)

語り手が何を目の前にしていようとも、心の目は常にレガットの存在の方へと引きつけられていて、その存在を中心に判断し、解釈しようとしているのである。この現象は語り手に新たな視点を与えるが、しかし同時に彼の視点の自由を奪い、限られたものになっている。このように、語り手がレガットの“version”のみを受け入れることには、想像力によるレガット

という他者への理解と共感という積極的な姿勢ばかりでなく、レガットとの同一化で彼の視野がますます制限されたという側面も読み取れるのである。

だから、船長の“What would you think of such a thing happening on board your own ship?”という問いかけに対して、語り手は同じ船長としての立場から答えることができない。

He was densely distressed — and perhaps I should have sympathised with him if I had been able to detach my mental vision from the unsuspected sharer of my cabin as though he were my second self. (117)

ここには、語り手がレガットの存在によって心の目の視野を狭められて、船長の立場に身を置いて事件を追体験するために必要な想像力を働かせることができなくなっているのが読み取れる。

もちろん私は、セフォラ号の船長の言うことの方が妥当だと論じたいのではない。ましてや、レガットの殺人罪は法に則って裁かれるべきだなどと主張したいのでもない。船長がレガットの合法的処置にこだわるのは、法という社会の約束事の範囲から外れたくないからだろう。彼のものの見え方もまた限られている。テキストに提示された見方は、全て言わば精神的視野狭窄に冒されていると言ってもよいだろう。私がこの章で確認しておきたいのは、テキストが語り手の視点を相対化する示唆を読者に与えている以上、語り手の“version”に従って解釈することは、物語をあまりにも単純化してしまい、この作品が本質的に持っている曖昧さを払拭してしまうことになるという点である。むしろここでは、レガットについても事件についても、それらについて語るという行為は、語り手の主観、利害による歪みから免れ得ないという点にこそ目を向けるべきだろう。



## 結語 意味の限定を阻む装置としての曖昧さ

語り手の紡ぎだす通過儀礼の物語は、一本の鮮やかな糸となって初めから終わりまで繋がっているように見える。しかしテキストはあらゆる表現をその一本の糸に撚り合わせようとするのではなく、その物語を絶えず解体しようとする方向に向かって開かれているのである。

ここまで、特にレガットの殺人行為をどう見るかについて、一般的な解釈に対して、それを覆す読みを示してきた。それは何も奇抜な解釈を示したいからではなく、テキスト自体が明快な解釈を阻んでいるのだということ を明らかにしたいからであった。

語り手と作者、読者の間の距離、語り手と語られるものの間の距離、語り手と他の人物の見方の食い違い、これらから生じる曖昧さは、確かに読者にとって居心地の悪いものである。だがその曖昧さこそが、文字通り語られたものとしての、この「物語」の本質的な要素であると言えるのだ。

この作品は、語る行為に必然的に付き纏ういかがわしさとでも言うべきものを現出させる。語る行為とは、世界の意味を、語る者が自分勝手に読み取り、提示すること。唯一絶対の真実などというものはなく、真実を語ると称する複数の語りが存在するにすぎないこと。あらゆるものは語られることによって、曖昧さを身に纏わざるをえないこと。ここには、試練と精神的成長のドラマの背後から、コンラッド作品の重要な一面であるこのような懐疑主義が顔をのぞかせている。そして読者は、語り手の示す解釈にいちいち翻弄されながら、正しい判断を下すことの不可能さを体験する。読者は、むしろ進んで倫理的曖昧さという罫に身を投じることによって、その懐疑主義の相貌を見ることができよう。語りの性質に目を向けることによって、‘The Secret Sharer’は、このような作品と理解されるのである。

### 注

- 1) 例えば、*Joseph Conrad: Critical Assessments* vol. III, ed. Keith Carabine (Helm Information, 1992) 中の ‘The Secret Sharer’ 論には

1949年から1990年にかけて発表された5編の論文が収められている。それらがそれぞれの時代を代表する批評的成果であるかどうかは疑問であるが、ともかくその5編中、Bruce Harknessによる同性愛者たちの邂逅と別れの物語という奇抜な解釈を除いては、全て通過儀礼の物語であることを前提に論じている。

- 2) Albert J. Guerard, *Conrad the Novelist* (Harvard University Press, 1958), pp. 13-29 参照。
- 3) H. M. Daleski, *Joseph Conrad: The Way of Dispossession* (Faber and Faber, 1977), pp. 171-183 参照。
- 4) Daleski, p. 174 参照。
- 5) Jakob Lothe, *Conrad's Narrative Method* (Clarendon Press • Oxford, 1989), p. 65.
- 6) Lothe, pp. 66-67.
- 7) テキストには '*Twixt Land and Sea* (Collected Edition of the Works of Joseph Conrad, J. M. Dent and Sons, 1947) を使った。'The Secret Sharer' は、その91ページから143ページに収められている。以下、このテキストからの引用は本文中にページ数を示す。
- 8) Ian Watt, *Conrad in the Nineteenth Century* (University of California Press, 1979) pp. 175-180 参照。
- 9) Joseph Conrad, *Typhoon and Other Stories*, ed. Cedric Watts (The World's Classics edition, Oxford University Press, 1986), p. xx.
- 10) 他に R. W. Stallman, Joseph Dobrinsky 等もレガットを船長の理想像として論じている。*Joseph Conrad: Critical Assessments* 所収の Stallman, "Conrad and 'The Secret Sharer'", 274-284 ページ, 及び Dobrinsky, *The Artist in Conrad's Fiction: A Psychological Study* (UMI Research Press, 1989), 66-67 ページ参照。
- 11) Daniel Curley, "Legate of the Ideal", in *Conrad: A Collection of Critical Essays* ed. Marvin Mudrick (Twentieth Century Views, Prentice-Hall, 1966), p. 80 参照。
- 12) Dobrinsky, 66-67 ページ参照。
- 13) Dobrinsky, 66 ページ参照。